
キャベツ畑の魔女

水色ペンキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キャベツ畠の魔女

【Zコード】

Z0408F

【作者名】

水色ペンキ

【あらすじ】

中年の実業家ダニエルと、その愛人リングダ。妻の留守にフロリダ旅行を計画した二人だったが、その途中、リングダのワガママで予定にはない土地に一泊することになる。そこはリングダのふるさとで、不思議な魔力が横溢する異常な土地なのだつた……。

「ねえ、このさきのジャンクションで降りましょうよ。あたしもう疲れちゃった」

リンダが叫んだ。フロントガラス越しの激しい走行風に、ハリケーンに晒されたヤシの木のように短いブロンドをなびかせている。オープンカーでの会話は聞き取りにくい。車体をやたらと震わせるクライスラーのエンジン音が、その上にさらにかぶさつた。フロリダへ向かう州間高速は真夏の太陽にあぶられて、路面からは人の背丈ほどの陽炎が立ちのぼっている。

「聞こえた？ ねえ、あなた？」

風に飛ばされそうなサングラスを指で押さえながら、今度は横を向いて尋ねた。運転席に坐っているのは、四十がらみの中年の男だ。「聞こえたよ。でもまだ日が高いじゃないか。このままいけば、晩飯はディトンで吃える。明日の朝からビーチに行けるんだぞ」「あたしもう疲れたのよ。お願い、ここらで今日は休みましょう」甘い声に、男はしづしづ頷いた。

「しようがないな。この辺にいい宿があるかなって、俺は知らないぞ」

高速道路は大きな湖を渡った。その先に、サウスカロライナ州サンティという標識が立っている。車はそこで高架から降りて、下の国道十五号線に入った。

「ひどい田舎だな」男が言った。降りてすぐのあたりは多少の住宅地があつたものの、道なりに五分も走ると、もう周囲は畠ばかりになってしまった。重低音を響かせながら走る一人の高級車は、いかにも景色とアンマッチだ。

「この先にモーテルがあるわ。そこにしましょ」男が頼みを聞いたことに気をよくしたのか、リンダの声はさつきよりも落ちついてい

る。

「ほら、見えてきた」

なるほど、何百メートルか先に、確かにモーテルの看板がある。近づくにつれて、「一スター・ドライバーズ・イン」というひねくれた文字が、男の目にも読み取れるようになった。車は右にハンドルを切ると、道をそれでモーテルの駐車場に入った。駐車場は隅っこにオンボロのピックアップが停まっているだけで、ほとんどガラガラといつてよい状態だ。

「荷物は全部持っていく。盗まれるといけないからね」

車から降りながら男が言った。リンダは不満げな表情をつくりながらも、一番小さいボストンバッグだけ手に取って歩き出す。あとのものはすべて男が抱えていった。

「リンダ！ 久しぶりじゃない！ どうしてたのよ！」

男がガラスのドアを押すと、かん高い女の声が耳に入った。男が声のしたほうを見ると、カウンターの前に立ったリンダが、彼の方を顎で示している。その隣では、フロント係らしい太った女が破顔して、何かしきりに頷いていた。男は不審に思いながらも、カウンターの前まで荷物を引きずつていった。

「紹介するわ。こちらダニエル・マクブランド。お友達よ。ダニー、こちらはロジー。あたしの幼なじみ」汗だくなつてリンダを見つめる彼を、彼女は何食わぬ顔でフロントの女に紹介した。

「はじめまして、ダニー」女は笑顔を作りながら、好奇心に満ちた目でダニエルを見た。

「はじめまして、ロジー」

ぎこちない握手を交わしたあと、ロジーが部屋の鍵をダニエルに渡した。ロジーは丸顔にえくぼを作つて、横目でリンダのほうに目をやつた。

「ダンディな彼じゃない。お友達だなんて失礼よ。どこで捕まえた

の？」

「やあね、仕事上のお付き合いよ」

「仕事？ まるでハネムーンみたいよ。大荷物すぎるわ」

話が途切れたところで、ダニエルが割ってはいった。

「こんなところで知り合いに出会うなんて、君たちラッキーだね」
リンダはちょっと困った顔をして、「ええ、そうね」と気のない返事をした。ロジーは不思議そうな顔でそのやりとりを見ている。

「ダニー、先に部屋に行つてて。あたしロジーとお話ししていくから」

「ああ、じゅっくり」

荷物を引きずつて部屋に向かうダニエルの背を、再開したお喋りの声が追い越していった。

どうしてたのよ、長いこと……

おととしまンハッタンに移つてね……

彼、いくつなの……

四十四歳、ちょうど倍だわ……

……。

部屋はちんまりして小綺麗だった。窓は大きく開け放たれていて、乾いた風が吹き込んでくる。荷物を片隅に積み上げると、ダニエルは窓から外を眺めた。

外は一面のキャベツ畑だった。広い畠地に緑色の葉っぱが玉を並べて、アーリントンの無名戦士の墓のように幾何学的な配列を見せている。その向こうには木立の丘があり、そのさらに向こうは、もう雲が浮かぶ青空だ。

ダニエルは溜息を吐いて、あらためて部屋の中を見回した。大きなダブルベッド、電話台、冷蔵庫、鏡台とデスク、ゆったりしたソファにテレビ。まるで小さな家の中の家具を、ひとつずつ部屋に押し込んだようなたたずまいだ。壁にはサウスカロライナの地図が掛かっていた。ダニエルは地図に近づき、今いる場所を確認した。

地図の右四分の一ほどは大西洋で、その上には州都「ロンビア」の拡大地図が配されている。さつきまで走つてきた州間高速95号線が地図全体を南北に貫き、ガラス板を流れる水彩絵の具のようにピンクの稻妻線を描いていた。先ほど渡つた大きな湖はすぐにわかつた。湖の手前から高速と平行するのが国道15号線で、橋を渡つたあと一本の道路はいつたん離れるものの、その先のジャンクションで降りるとしぜんにこの国道に行き当たるようになつていて。二人はそこで左に折れて、国道沿いに何マイルか走つてきたのだ。

「何がコースタルだ。海岸から六十マイルも離れてるじゃないか」ダニエルが悪態をついたちよづきのとき、ドアが開いて、リングダが部屋に入つてきた。

「ダニー、『めんなさい、怒つてる?』
「いや」
「怒つてるわよね」
「怒つてないわ。ただ」
「……」
「君は、じいが初めてじゃない。そりだらつへ。」
「ええ」
「前に住んでたことがあるとか?」
「そう。ふるさとなのよ」
「なるほどね。そう言つてくれれば、疲れたなんて言わなくとも寄つたのに」
「ありがとう。でも疲れちゃつたのは本当よ。オープンカーで旅行なんて初めてだもの。それにこの近くに来るまでは、寄りたいなんて思わなかつたのよ。いい思い出ばっかりじゃないし、もう身内もいないし」

最後の言葉を聞いて、ダニエルは安堵の溜息を漏らした。彼が恐れているのは、リングダが身内に彼を紹介してしまうことなのだ。

「かまわないや。こんどの旅行は君の希望に添えなかつたから、ア

レンジが必要なら何でも言ってくれ

「希望？ そうね。できれば西海岸までドライブがよかつたけど、一週間じゃ無理だものね」

「すまん。それ以上は休みが取れないんだ」

「奥様がシンガポールから帰つてくるんでしょう。わかつてゐるわ」ダニエルの妻はインテリアのデザイナーで、シンガポールで開かれた品評会に出席している。リンダとダニエルの短い夏休みは、それに合わせて急きょ日程を組んだものだった。

「飛行機なら、カリフォルニアでもどこでも行けたんだが」

「ダメよ、ドライブでなくちゃ。旅行つていうのはね、沢山のものを通りすぎることに意味があるのよ。飛び越えちゃいけないの」「そうかな」高速道を使つなら、通り過ぎるのはコカコーラの看板くらいいだ。

「ゴー・ウエスト。アメリカはね、西へ行くほど何でも若くなるのよ。人も、土地も、空気もね。もちろんあなたもよ」

「そのうち一緒にに行こう。いつか そうだな、いつか」

「行けるといいわね。でも多分夢のままよ。人生つてそういうものだわ」

「そんなことないさ」

「そつかしら。地獄で開かれるインテリア品評会があるなら、チャンスはあるのかもしれないけど」

ダニエルは渋い顔をした。

「ごめんなさい、冗談よ」

「わかつてくれ。ぼくも辛いんだ」

「いいのよ。あなたは永遠に、あたしなんかの手には入らないひと。高い高いお城の窓に、暖炉のあかりに照らされてるのが見えるだけ。あたしは森の中からそれを見て、夜な夜な悲しく遠吠えをする狼でいいの。そして

「そして？」

「こつか奥様と、あなたのお肉を半分にするのよ。そのくらいの権

利はあつてもいいわよね」

その晩ベッドの中で、ダニエルは故郷についてリングダに聞いた。リングダは何かから話そとかと少し考えた様子だったが、やがて男の胸で話しあじめた。

「話すことなんて大してないわ。普通に子ども時代を送つて、ハイスクールを出て、演劇の勉強をしようと思つてフィラデルフィアの学校に行つたの。でもうまいかなくて、ニューヨークに出てダンサーをするようになつた。そこで偶然あなたと知り合つたの」

「フィラデルフィアからあとのことは、前も聞いたな、確か」

「じゃあ、そうね　あたしが魔女の子孫だつて言つたら、ダーリン、信じてくれる？」

「魔女？　魔女つて、ディズニー映画に出てくるみたいな？」

「まあ、そうね。あんなにワルっぽくはないけど。要はへんてこな術に親しんだ女人の人、つて感じかしら」

「面白いな。話してくれないか」

「いいわ。じゃ、最初から」

リングダは低い声で話し始めた。

「ずっと昔ね、フロリダは瘴氣地帯で、悪魔の子どもが住んでるって言われてたのよ。当時はスペイン人たちがフロリダを支配してて、カトリックの古い道徳觀が、移民やインディアンたちの間で主流だつたの。魔女の力は悪魔由来だから、そういう場所の方が、むしろ魔女たちの力も強まつたの。ところが十九世紀のはじめに、フロリダはアメリカになつちゃつたじゃない？」

「ああ」

「そしたらフロリダにこだわつても意味ないじゃない。暑いし、風土病が多いし。そこで、フロリダの魔女はだいたい二手に分かれて移民したのよ。かたつぽはメキシコ経由かキューバ経由で南米へ、もういっぽうは海沿いに北へ。あたしの先祖は、サウスカロライナまで来て定住した魔女の一族なの」

「ほつ。どんな魔法を使うんだ？」

「魔法 자체はね、ちょっと幻を見せたりする程度よ。魔女つていつも、普段やることは薬屋さんとかモグリのお医者さんみたいなものなの。でも、それだけじゃないところが魔女のすごいところね。あたしたちが来てから、ここはちょっと不思議な土地に変わりはじめたのよ。影響力ってやつ？」

「どういうふうに変わったの？」

「たとえばここでは、人生の不思議が、五割り増しくらい余計に続くようになったのよ。ほかの土地だと十歳くらいで失われてしまう世界のフシギが、ここでは十五歳くらいまでは有効なの。ジュニアハイスクールの子のところにも、サンタクロースが来るってわけ。二十歳くらいで気づいてしまう人生の矛盾にも、三十歳くらいまでは気づかない。三十歳で倦怠期に入る夫婦だって、四十五歳くらいまでハネムーン気分なのよ」

それは要するに、子どもっぽい人が多いだけじゃないか？ そういうわけで、ダニエルは思い直した。「そりや素晴らしいね」

「ほかにもいろんな摩訶不思議なことがこの土地に起こったのよ。でも、ひとつ問題があつたの。この土地の魔力は、とにかくいろんなシンボルに影響されたのよ。シンボルっていうのは、山とか川とか道路とか、とにかくいろいろなもの。たとえば街中にあたらしい建物が建つと、それを中心に魔力の効果も、分布とかも変わってしまうの。科学的じゃないのね。まるで悪魔がダジャレ遊びをしているようなものだったの」

「予測不可能ということか」

「ええ。そして1926年に、ものすごい変化が起きたのよ」

「変化？ どんな？」

「国道よ。大統領がクーリッジのときに、国道十五号線（Route 15）がこのあたりを真つ二つに分断したのよ」

「ルート15……モーテルの前を走ってる、あれか」

「そう。そして、ルート15のこちら側と向こう側で、不思議な変

化が起つり始めた

「どんな？」

「R-15の太平洋側ではね、キスをするだけで赤ちゃんができる
ようになつたのよ」

「はあ？なぜ？」

「言つたでしょ、アメリカでは西に行くほど全てが若いの」

「そんな。じゃあ、人口爆発じゃないか」

「そうよ。村が一気に町になつたわ」

「しかしそれじゃあ、女の子は大変だ。キスをするたびにいちいち
子どもを作つてたら」

「それは大丈夫。赤ちゃんは、キャベツが産むのよ」

「キャベツ？」

「そう。グリーンボールのキャベツ。キスをした男女の近くにキャ
ベツがあると、その中から赤ちゃんが生まれてくるの」

「そんなバカな」

ダニエルはモーテルの裏にあつたキャベツ畑を思い出した。墓石
のようつに整然と並んだ、玉のようつなキャベツ。

「嘘みたいな話でしょ、でも本当なの。R-15のこの辺り側では、
そういうことが全部本当になるのよ」

リンダは悪戯っ子のようつに笑つた。

「お話はこれでおしまい。明日のお昼くらいままで」テイトンへ行け
れば、午後はビーチで遊べるわね。今日は早く寝ましょ」

「ああ、ゆつくり休もうか」

「じゃあ、寝る前にキスして」

ダニエルは一瞬ためらつた。しかし值踏みするよつに見つめるリ
ンダの目を見ると、すぐに彼女の後頭部に腕を回した。どうせ[冗談
に決まつて]いる。

「おやすみ、ハリー」

「おやすみ、ダーリン」

翌朝、ピックアップのエンジン音でダニエルは目を覚ました。外はまだ暗い。ふと見ると、ベッドの中にリンダの姿がない。ダニエルはむくりと体を起こした。と、タオルケットの上から一枚のメモ用紙が落ちた。それにはこうあった。

赤ちゃんが落ちついたら、また会いましょう。

あなたのリンダ

ダニエルは飛び起きた。部屋を見回し、リンダのボストンバッグを搜す。ない。次に窓に駆け寄つて、思い切りカーテンを開いた。外は真っ暗だ。慌てて部屋の明かりをつけると、窓枠から漏れる四角い光が、烟の一角を照らし出した。

暗くてよくわからないが、キャベツが一個、なくなつているようだ。

ダニエルは急いで服を着ると、フロントに向かつた。

呼び鈴を鳴らして出てきたのは、いかにも不機嫌そうな若い男だ。
「チックアウトですか？ こんな朝早くに」
「いや、リング、妻が、ここを通らなかつたかと思つてね」
「さあ？ 存じませんね。わたしも眠つてましたから」
「ここから一番近いバス停はどこだ？」
「南に半マイル先です。こんな時間にや走つてしませんがね」
「ロジーとかいう女はいるか？」
フロント係は、あからさまに怪訝な顔をした。

「誰ですか？ それ」「フロント係の」「うちのフロントは三交代ですが、全員男ですよ」「……」

ダニエルは混乱した頭で部屋に戻った。すべてが何かの冗談で、

バスルームにでもリングダが隠れているかと捜したが、やはり誰もいなかつた。彼は荷物をまとめると、夜明け前にモーテルをチェックアウトした。朝の空気はオープンカーには冷たい。

そして、リングダとはそれっきりになった。その年のクリスマスまでは。

その年のクリスマスプレゼントは豪華だった。サンタクロースの恰好をしたリングダが、二人の男を連れてダニエルの家を訪れたのだ。一人は弁護士で、凶悪な宣告を書き連ねた書類を彼にプレゼントした。もう一人は四ヶ月くらいの赤ん坊で、それは彼が父親になったことを示す、神からの贈り物だということだった。

「養育費の請求に関して、こちら側の準備はすべて整っています。ミスター・マクブランドにおかれましては、裁判で処理されることも示談で済ませることも可能ですが、いかがなさいますか？」

弁護士が言うと、ダニエルの妻はヒステリーを起こして家の中のものを破壊しあじめた。

法廷で「リングダの妊娠線を調べる」「その子はキャベツが産んだ子だ」と息まいたダニエルの言葉は、往生際の悪い姦通者の妄言として、ながく法學生の冗談の種となつた。心証もすこぶる悪く、慰謝料と養育費は彼の予想をはるかに上回る高額となつた。裁判官はダニエルに、今後リングダとその子の周囲30メートルに近づくと、問答無用で逮捕されると宣言した。

「魔女め！ 魔女め！」

法廷を去りぎわに叫んだダニエルの声に、リングダは満面の笑みで応えた。

年が明けて、妻はダニエルの元を去つた。リングダは『不道徳な父親から赤ん坊を遠ざけるため』に、金をむしり取つたあとは彼の前から完全に消えた。

そして一年が経つた。

妻を失ったダニエルは、はじめ仕事の鬼となつた。やがて心が落ちつくと、以前の通り有能な実業家としてマンハッタンを飛び回るようになつた。彼の奇矯な発言は伝説となつて、いつしか彼自身のゴーモア感覚の発露として扱われることになつた。

今ではレタス料理の評論家として、ケーブルテレビに出たりしている。

アメリカって、そういう国なのである。

(後書き)

(注)

地名、道路名称などは、実在のものとは何ら関わりがありません。
ん。

R - 15区分はアメリカには存在しません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0408f/>

キャベツ畑の魔女

2010年10月8日15時58分発行